道東から出発の 新ボランティア紹介

2016年度3次隊

①現地での活動内容
②活動の抱負・目標
2年間でやりたいこと

青年海外協力隊

菊池　健介さん
出　身:津別町
派遣国:ドミニカ共和国
職　種:体育

派遣国のドミニカ共和国のラ・ロマーナには綺麗なビーチがあるので、休日には是非足を運び、カメラで沢山の風景を撮りたいです。

①NGOの施設で、小学校から高校の体育の質の向上を図る。具体的には、バスケットボールの指導と練習方法の改善、スポーツイベントの運営です。

②赴任後は現地の体育の授業がどのようなものなのかを観察し、任国にあった指導を行っていきたいです。目標は、生徒が楽しみながら学ぶことのできる授業を作り上げていくことです。そして、運動嫌いな生徒を少しでも減らしていきたいです。

研修員受入　アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ

「アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ(African Business Education Initiative for Youth、略称:ABEイニシアティブ)」は、5年間で1000人のアフリカの若者に対し、日本の大学院での教育に加え、日本企業でのインターンシップの機会を提供するものです。アフリカの産業発展をけん引する優秀な人材を育成し、アフリカの持続的な経済成長に貢献するとともに、日本企業がアフリカ市場に進出する際の水先案内人としての活躍も期待されています。道東地域では、現在7か国10名が帯広畜産大学で学び、約2年半、それぞれの研究室にて教授、学生とともに研究を行っています。学業以外にも、地域交流イベントや留学生間のネットワーク作りにも精力的に参加し、帯広・十勝を盛り上げています。また、インターンシップでは十勝管内の(有)タナベ様や(株)ノベルズ様にお世話になり、日本式経営や専門技術のご指導をいただいています。

ABEイニシアティブの研修員と畜大の留学生

中小企業海外展開事業　中小企業現地調査プログラム in ラオス・ミャンマー

9月26日～10月1日の6日間、日本全国から集まった中小企業5社の皆様と、ラオス・ミャンマーにて廃棄物処理分野について現地調査を行ってきました。北海道からは(有)タナベ(帯広市)様が参加されました。

ラオス・ヴィエンチャンの最終処分場を視察

中小企業現地調査プログラムは、ODA(政府開発援助)を活用したJICA中小企業海外展開支援事業の一環で、海外展開を考える日本の中小企業と途上国の抱える開発課題を結び付け、国際協力に繋がるビジネス展開を支援するものです。調査プログラムに参加された企業は、日本でリサイクル事業や廃棄物を資源化・燃料化する機械の製造・販売などを行っており、現地では廃棄物処理場の視察、廃棄物関係省庁や関係企業との意見交換を行いました。両国とも廃棄物に関する法律がまだ整っておらず、廃棄物は適切な処理がされることなく、処分場に山積みになっていました。今回の調査を通じて、参加企業の皆様がビジネスチャンスを見出して頂き、両国の廃棄物処理分野における課題解決に繋がることを期待しています。

ご案内

知らないなんて、もったいない。
中小企業海外展開支援セミナーin北見

●日時:2017年1月20日(金)15:00～
●会場:北見市民会館

北見市にて、中小企業向け海外展開支援セミナーを実施します。今回は、JICA・JETRO・中小機構が行っている、海外展開をサポートする様々な支援事業をご紹介。海外展開に役立つ情報をお届けします。JICA事業を活用し、パラグアイでゴマ加工品の普及を目指す株式会社わだまんサイエンス(京都市)の代表取締役深堀様を講師としてお招きします。

帯広市がJICA国際協力感謝賞を受賞しました
～長年にわたる協力やJICAスキーム活用の実績を評価～

「第12回JICA理事長表彰」の受賞者・団体が決定し、JICAから帯広市に対し、「JICA国際協力感謝賞」を贈呈いたしました。この賞は、国際協力の業務に長年にわたって協力頂き、特に功績があったと認められる個人と団体にお贈りしているものです。同市は地方創生の観点から、草の根技術協力等のJICA事業を活用しながら積極的に中小企業支援を行い、市が進める国際化の拠点である「森の交流館・十勝」を通じて地域の皆さまの国際協力への理解促進に大きく貢献してきました。これらの意欲的な国際協力・交流への取り組みや、十勝管内及び道東地域における国際協力・交流の牽引役としての活動が高く評価され、今回の受賞へと繋がりました。表彰式は10月13日(木)にJICA市ヶ谷ビルにて行われ、受賞者に対して北岡伸一JICA理事長から表彰状及び感謝状を贈呈いたしました。今年度は帯広市の他、JICA理事長賞が8事業と個人5名に対して、JICA国際協力感謝賞が4団体と個人13名に対して贈呈されています。

北岡理事長より感謝状を贈呈

世界から日本へ 研修員eye(アイ)

JICA北海道(帯広)では、開発途上国から来た多くの研修員が、自国で必要とされている知識や技術を学んでいます。

ソロモン諸島からやって来たリッチーさん

研修コース:地域住民の参加による持続的な森林管理
▮名前:リッチーさん
▮出身:ソロモン諸島

TAGIO TUMAS(タギオ トゥマス)
ソロモンの現地語で"ありがとう"

Q1 ソロモン諸島ってどんな国?

オーストラリアの北東、南太平洋に浮かぶ島々で、国の80%が熱帯雨林で覆われています。軍隊の無いとても平和な国で、警察も銃を携帯していません。

Q2 JICAでの研修の目的は?

私は森林調査省で働いており、現地のJICAスタッフの勧めで、日本の進んだ森林管理技術を学ぶために研修に参加しました。

Q3 日本での生活はいかがですか?

日本は技術がとても発達した国。日本人は皆勤勉で、時間通りに行動します。のんびりした生活を送るソロモン諸島の人々とはとても違いますね。

Q4 日本で学んだことをどのように国で活かしたいですか?

ソロモン諸島の主要産業である林業を持続的に発展させるために、日本の森林管理技術や国・自治体の連携した取り組みを参考にしていきたいです。

~JICA研修を支えてくださっている方をご紹介します~

一般社団法人
海外林業コンサルタンツ協会(JOFCA)
長縄 肇さん

Q1 国際協力(JICA研修事業)に携わるようになったきっかけを教えてください。

林野庁に勤務していた30代の頃、林業分野で初めての海外プロジェクトがフィリピンで立ち上がりました。森林伐採は世界各地で問題になっていたこともあり、そのプロジェクト参加に手を挙げました。

2003年中国植林無償プロジェクト開始当時の山々

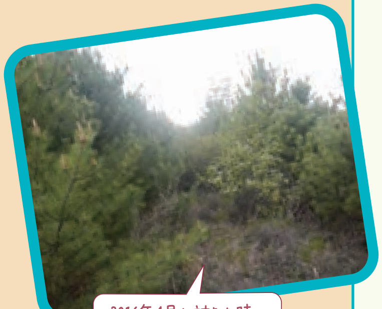
Q2 JICA研修に対してどのような想いでご協力いただいていますか?

植林の指導をし、植林後3年経過

研修員が研修後にこれまで非協力的だったプロジェクトに前向きになったり、研修中に教えたPCM(プロジェクトの運営・管理の手法)が現在の仕事に役立っていると聞くと嬉しく思います。仕事でケニアに行く度に、過去の研修員が集まって喜んで昔話をしてくれます。このような取り留めのないことですが、途上国の人たちのお役に立てればと思って取り組んでいます。

Q3 思い出に残っているプロジェクトのエピソードを教えてください。

中国でのJICA植林無償資金協力プロジェクトに指導者として派遣された時のことです。現地だけでなく、日本において視・聴・嗅・味・触の五つの感覚によって指導がしたいと考え、関係者を説得し、プロジェクトの5年間、毎年3名程を国別研修に参加させました。今年、当時の関係者と植栽後の跡地を見に行きました。当時はげ山であったところが見事に森林に復元し、適切に森林が守られていることを実感しました。



2016年4月に訪れた時の油松の植林地

ボランティアの現場から

青年海外協力隊

稲葉 哲史さん

派遣国:パラグアイ
出身:北見市
職種:小学校教育
派遣期間:2015年10月~2017年10月

日本の南中ソーラン、決めポーズ!

こうやってテレレをみんなで回して飲みます

シーソーでピース!子供はみんな無邪気で可愛いです

Hola(オラ)!私は日本の反対側にある南米の「パラグアイ」というところで小学生の子供たちに算数を教えています。パラグアイは南米のど真ん中に位置し、その大きさは日本と同じくらい。パラグアイといえば何と言っても「テレレ」が盛んです。テレレとは冷水でいれるマテ茶の一種で、パラグアイの人はどこにいってもテレレ、何をしててもテレレ、テレビにでてくるニュースキャスターすら手元に水の代わりにテレレを置いているぐらい、パラグアイのソウルフードならぬ、ソウルドリンクなのです。パラグアイの人たちは温厚でいい人たちばかり。私の任地では一度会ったら友達、3度話したらもう親友ぐらいの近さで会うたびに挨拶してきます。逆に挨拶を返さないと「体調悪いの?」と心配されるくらい、とってもあったかい人たちに囲まれて今日も楽しく活動しています。南米にお立ち寄りの際はぜひパラグアイへ!

廃材をつかって繰り上がりの足し算を教えています